

第3章 退所生および施設へのヒアリング調査について

1. 調査の概要 P47
 - 1) 調査の目的
 - 2) 調査対象者
 - 3) 調査の実施時期
 - 4) 調査の方法
 - 5) 調査の内容

2. ヒアリング調査の内容について P49
 - 1) 退所生へのヒアリング
 - 2) 自立支援コーディネーターへのヒアリング
 - 3) 施設職員のグループ・ヒアリング
 - 4) ヒアリング調査を終えて

3. ヒアリング調査を終えて..... P70

第3章 退所生および施設へのヒアリング調査について

1. 調査の概要

1) 調査の目的：

アウトリーチ・プロジェクトに参加した施設の職員および退所生に直接ヒアリングすることで、本プロジェクトの効果や改善点、必要とされるアフターケアの在り方を明らかにし、関係者や広く社会に伝える。

2) 調査対象者：

- ①本プロジェクトの支援を受け、本センターに手紙をくれた退所生の中から3名
(学生、勤労者、子育て中の人)
- ②本プロジェクトに参加し、本センターに手紙をくれた施設職員の中から2名
(都内および都外の施設)
- ③本プロジェクトに参加したNPO法人 NPO STARSの施設職員 6名
(全国各地の施設)

3) 調査の実施時期：

2020年10月～11月 (全6回)

4) 調査の方法：

Zoomを使つてのオンライン調査

インタビュアーは法政大学 現代福祉学部・人間社会研究科 岩田美香教授

所要時間は、上記2の①退所生は40～50分間、②施設職員は1時間20～40分間、③グループヒアリングは2時間17分間。

5) 調査の内容：

①退所生への主な質問項目

- Q 1. 本人について (性別、年齢、入所期間、入所理由など)
- Q 2. 現在の状況 (現在の家族・同居者、仕事、収入、定位家族)
- Q 3. コロナ禍での影響・生活の変化
- Q 4. 日常頼れる人、相談する人
- Q 5. 退所後に最も困ったことと、その相談・解決策 (解決できなかった場合)
- Q 6. 施設との関係 (どのように、あるいは、なぜ、とれなかったか)
- Q 7. 今回のプロジェクトの評価 (良い点、改善が望まれる点)
- Q 8. 希望する支援 (誰にどんな支援をしてほしいか)
- Q 9. その他

②施設職員への主な質問項目

- Q 1. 施設概要 (定員、設立時期、小規模化の状況)

- Q 2. リービングケアの状況（担当者、施設外の資源、資源の開発、家族関係への支援）
- Q 3. 退所生への支援（日常的、非日常的、コロナ禍における退所生への支援の変化）
- Q 4. 退所生への支援の難しさとその要因
- Q 5. 今回のプロジェクトでの退所生との関係の変化
- Q 6. 今回のプロジェクトの評価（良い点、改善が望まれる点）
- Q 7. その他

③施設職員のグループヒアリングの主な質問項目

- Q 1. リービングケアについて
- Q 2. アフターケアと今回のプロジェクトについて
- Q 3. 今後のアフターケアに向けて

2. ヒアリング調査の内容について

1) 退所生Sさん（20代女性、夫と2人の子どもと同居）

①児童養護施設への入所について

児童養護施設には高校3年生から1年間いた。小学校に入る前も保育園と連携している施設にいたことがある。5人兄弟の一番上。母親が精神的に弱く、離婚を繰り返したので、父親は4人いた。自分とすぐ下の弟は父親が同じ。父親が変わるたびに、県外を転々としていたが、中学2年の時に兄弟バラバラで施設に入るか、祖母のところに行くかを選べと言われた。兄弟がバラバラになるとかわいそうだと、祖母に引き取られたが、祖母と上手くいかなかった。高校は出たかったので、児童相談所に相談した。担当の人はいい人で、児童養護施設と里親のどちらにするかと聞かれた。母親が里親は納得しなかったので、児童養護施設に入ることになった。

施設にいたときは門限が8時だったので、大変だった。施設から高校まで1時間かかった。駅から施設までも自転車で30分かかる。退所する時には、音楽が好きなので、お風呂で聞けるスピーカーをもらった。施設を出てから8年になる。

②現在の生活状況について

夫と4歳と2歳の子どもと4人暮らし。仕事は保険の営業。以前は接客業をしていた。自分の収入は月11万円ぐらい。近くのファーストフード店で夜と週末にバイトをしているので、追加収入が3万円ほどある。

夫は今年の1月に転職し、住宅リフォームの営業をしている。9月から社員になり、月収20万円だけれど、ここから毎月3～4万円、仕事に必要なものが引かれている。会社はこの分をボーナスで返すと言ったのに、4か月分の12万円の内8万円しか返してもらってない。残りは次のボーナスで返すと言われている。月1回しか休みがないし、朝6時から夜の11時過ぎまで家に帰ってこない。夫は子どもを大切にしてくれる。お休みの時は保育園の送り迎えもしてくれる。

私の両親は亡くなった。自分の祖母は車で10分のところに、夫の母親は車で5分のところにいる。義母は私が夜働く時は助けてくれるが、あまり子育てを手伝ってくれない。72歳の祖母が一番助けてくれる。仕事に行かなければいけないのに、子どもが熱とか出したときも来てくれる。

③施設を出てから困ったことと相談した人

施設を出た後で一番困ったことは実母の自殺。上の子を産んだ時だった。母親かどうか確認してほしいと警察から連絡がきた。伯母が子どもを見てくれたので、夫と一緒に行った。その時は子どもの存在に一番支えられた。

夫がお金を使ってしまうので困っている。切迫流産で入院していたときも30万円使いこんでいた。離婚のことも考えたが、夫の母親から「お金は貸すから、離婚しないで。」と言われた。今、お金の管理は自分がしている。

祖母以外に相談できる人は母親の弟の叔父さんとそのお嫁さん。叔母は私より11歳年上で年も近く、よく話を聞いてくれる。10分ぐらいのところに住んでいる。出産の里帰りはそこでお世話になった。

施設のMさんから季節の変わり目に、「元気？」と連絡してくれる。自分の心に余裕があるときは返信している。Mさんは施設の学園祭にも誘ってくれたり、誕生日にも連絡してきてくれる。

母親が亡くなったとき、子どもが生まれたときは、Mさんに連絡した。Mさん以外に知っている職員は施設にいない。離婚を考えたときは、どこに相談に行ったらよいかわからなかった。Mさんには調子が良い時は話せるのだけれど、困ったときはなかなか話せない。

④ コロナの影響による生活の変化

コロナになって、仕事が1か月半、在宅勤務になったが、在宅で営業はできない。8月までは仕事ができなかったので、収入が大幅にダウンした。営業の仕事は歩合制。昨年よくがんばったので半年前の査定で基本給が10万円になった。

在宅中は保育園を利用できなかった。子どもたちが家にいて、食事もつくらなければならない。感染が怖いので外にも行けないので、100円ショップで大きな画用紙を買ってきて、いろいろ作って遊んでいた。家に子どもとずっといるのは大変。小学校5年生の時は学校に行かず、弟の面倒をみていた。弟にどなりちらしていた。保育士にもなりたくらい子どもは好きだけれど、心に余裕がないとだめだと思う。

⑤ 今回のプロジェクトについて

M先生からLINEで連絡があって、「やってみないとわからないけど、何かできるかもしれない。」と言われた。「他の人は大丈夫？もっと困っている人がいるのでは？」と聞いたら、「そんなこと言わないで」と、M先生が背中を押してくれた。

最初に食料品などが来て、とても助かった。心理士の人や職員の方々からのいろいろなものと一緒に家に持ってきてくれた。子ども服や手作りのマスク、調味料とお米など。お米が一番助かった。食べ物さえあれば、なんとかなるから。

特別支援金は家のローンや子どもの服とおむつ、食品に使った。とても助かった。ふだんキャッシュレス決済で、明細もスマホで見ているので、報告用のレシートを集めるのが大変だった。

支援金がなかったら、食べ物をもやしにして、電気を消すとかしたと思う。自分が小さい頃、生活に困ったので、子どもにはそういう思いはさせたくない。働く時間を増やしたかもしれないが、そうすると、子どもとの時間が減ってしまう。

⑥ どのような支援があるとよいか

離婚を考えたときに、保育園に入れなかった。国は「子どもを産め」というのに、「働け」ともいう。そうすると、夫の協力が必要。昔は夫が働き、女の人が子育てや家のことをしていたが、今は、共働きだと、女の人負担が多くなる。子どもを産んだ後の支援が少ない。

今、2人の子どもは別の保育園に通っている。毎日、送迎に30分かかる。仕事が遅くなると、保育園から「早く子どものお迎えにきてほしい。」と連絡が来る。また、コロナの時、「本当に保育園に来ることが必要？」と聞かれた。できれば家で保育したかったけれど、働かなければいけなかった。子どもへの感染が毎日怖かった。

小さな子どもがいるので、インフルエンザの予防接種を受けたい。夫も自分も会社から補助がでるので受けたいのに、10カ所連絡して、全て終了していた。予防接種を受けたいのに受けられない。みんな困っているのではないか。

悲しいニュースが多すぎて、心がついていかない。子どもがいるから友だちと遊ぶ時間はない。ストレス発散が苦手なので、日々模索中。子どもを産むまでは、手を切ったりしていたが、よくないのでやめた。言えないことが多くなると、喉の奥が痛くなる。一人でどこかに行きたい。趣味はギターを弾くこと。もくもくと料理をしたり、お菓子を作ることも好き。一人でいたい。

2) 退所生Hさん(20代男性、大学生)

①本人について

22歳男性。都内の施設には4～9歳の間暮らしていた。その前に一時保護の施設に半年ぐらい滞在したことがある。入所理由は、1歳の時に母子家庭になり、金銭面で養育するのが難しかったからと聞いている。

現在は、母親と2人で暮らしている。大学4年生。ITを専攻。IT企業に就職が内定している。大学1～3年の頃はバイトをしていたが、4年は研究が忙しいために、アルバイトはできていない。

②コロナでの生活の変化

母親は飲食業で働いており、コロナのために仕事がなくなり、収入がなくなったので、生活が非常に厳しくなった。しかし、施設や大学が支援してくれた。第1種の奨学金(無利子の貸与型)を受給しており、今年から大学の授業料70万円の免除も始まった。また、区から緊急給付金もあり、なんとか生活できている。

大学では一斉にオンライン授業になったので、学生はPCなどを用意する必要があった。自分はITを学んでいるので、PCは使っていたが、授業用のマイクやカメラを購入する必要があった。大学からは機材代として1万円支給された。PCを持っていなければ10万円ぐらいは必要だったろう。また、通信費はPCの回線なので、電話代も含めて月4,000円程度払っている。

③施設との連絡

9歳の時に施設を出て、幸運なことに施設の近くの都営住宅があたった。施設には電話も頻繁にしているし、施設のイベントの手伝いにも行っている。2～3か月に1回ぐらいは施設と連絡。近所なので連絡しやすい。

施設の先生から「困ったらいつでも連絡していいよ」と言われていた。いつも連絡をくれるのはまとも役の人だが、施設に遊びにあって、いろんな職員と話している。

施設で自分を担当してくれた先生は既に辞めてしまったが、ベテランの職員さんともつながっている。退所生が集まるバザーなどのイベントもあり、そこでも退所生や職員とつながりができる。

④施設を出て困ったこと

一番困ったことは、大学に進学する学費の工面だった。高校卒業後の就職も考えた。でも、どうしてもITを大学で学びたいという気持ちが強かった。施設の先生に相談し、奨学金などの情報をもらった。成績もよかったので、第1種奨学金をもらうことができた。

住んでいる自治体にも相談した。担当の人は親身になって聞いてくれたが、特に母子家庭の進学支援はなかった。

施設にいたときは、勉強は嫌いだった。苦手な科目はあったが、テストはがんばった。わからないことは高校の先生や友達に聞いた。塾には行っていない。

大学入試以外で困ったことは、施設を出てからは母親の収入が安定していなかったので、生活保護をずっと受けていた。高校2年生の時に、生活保護を抜けようとした時は、数か月間、生活が大変だった。無駄のものは全て切り、節約に努めた。

母子家庭の子どもの無料の学習支援が1か月ぐらいあったので参加した。大手の塾の人たちが教えてくれた。当時は子ども食堂や学習支援などはなかった。

⑤今回のプロジェクトについて

最初に支援物資として、ささみの肉、缶詰、パンなどが届いて、とても助かった。1週間ぐらいの食費が浮き、ありがたい支援だった。できればよいが、シャンプーなどの日用品も入っていると嬉しい。10万円の緊急支援金についても、2~3か月前に施設から話があった。学費の支払いがぎりぎりだったので申請した。使途報告書用の学費の領収書が10月末に届くので、締め切りを過ぎそうだったが、待ってもらった。

⑥今後希望する支援

自分は研究が忙しくてバイトができないが、自分のまわりの学生はバイトをしたくてもなかった。こうした学生への仕事の斡旋があるとよいのではないかな。

自分がお世話になった施設は18歳で退所し、就職する人が多い。大学に行きたい人に行ける支援があるとよい。そうすれば、より安定した職につける。就職活動をしていても、大学から受け付ける企業が多い。大学に行くと、仕事の選択の幅も広がる。大学に児童養護施設出身の学生がいるが、進学時のお金が大変だったと言っている。

施設には大学生のモデルはいなかった。でも、自分は高校だけだと学べないITの専門知識を学びたかった。施設を出て、学校でPCを触ったらとても楽しかった。学びたいことがあれば、母親もお金を出してくれるといった。自分が小学生の時はPCに触るだけだったが、今の子どもたちはプログラミングを学べたりするので、ITに関心のある人が増えるのではないかな。

コロナ下でもIT業界は人材不足なので、就職には困らないが、建築科の学生は就活に苦戦している。また、飲食業のバイトは減ったが、IT業界では入力作業などもある。バイトや仕事がない人たちにバイトや仕事の情報提供や斡旋するような支援ができるとよいのではないかな。

3) 退所生Mさん（20代女性、勤労者）

①本人について

現在、29歳、女性。2歳～18歳の時に施設で暮らした。入所した理由は、親の貧困とネグレクト。高校を卒業し、施設を退所した後は学校求人で見つけた寮付きの有料老人ホームに就職。介護職として真面目に働き、サブリーダーになったが、入居者の何気ない一言で躓き、摂食障害を発症し、休職、退職することになった。

今年3月に離婚し、今はひとり暮らし。元夫は、自分が知らない間に自分の名義で多額の借金を作っていたり、精神的支配もひどかった。また、元夫は仕事もせず、家にお金も入れず、家事もせず、自分が稼いだお金を搾取するなどのモラハラ行動もあった。

姉と兄、母がいるが、関係性は良好とは言えず、疎遠になっている。兄とはLINEでつながっているが、頻繁に連絡をするような関係ではない。

②コロナによる影響

風俗店に勤務している。仕事の収入は月額で十数万円程度だが、ばらつきがある。コロナの影響で2月下旬から客足が遠のき、緊急事態宣言発令の間は休業となり、全く働けていなかった。解除後、現在も、金曜日と土曜日しか出勤させてもらえていない状況。8月に他店に面接や体験入店にも行ったが、店の対応も悪く、さらに、その客に病気を移され、働くのが困難になってしまった。

コロナ以前にも昨年からの体重減少等の異常はあったが、今年になって離婚・引越し後に緊急事態宣言で休業になったことにより、収入が途絶え、無茶な節約を余儀なくされたことにより、摂食障害が再発した。

③相談した人

主に施設の職員さんに相談している。今年1月に離婚の相談をしていたこともあり、その後ずっと、緊急事態宣言発令期間以外は、困ったことがあると駆けつけてくれたり、頻繁に相談に乗ってもらっている。数日に1度はLINEでやりとりをしてくれている。

兄には相談はしない。本当に困ったことがあると、担当の職員さんに連絡して助けてもらっている。18歳で施設を離れるときに、「困ったことがあったらいつでも連絡しておいで」と、言ってもらっていた。

④施設を出て一番困ったこと

退所後に一番困ったことは、大きな施設だったので、ひとり暮らしを始めると、表現するのが困難なほどの孤独感があった。この先、自分が仕事を失っても、飢えても、お金が無くなっても、ホームレスになっても、既に退所した身であり、誰も助けてくれない。失敗しても、他の人みたいに実家に帰ったりもできない。当然親にも頼れない。誰にも気づかれず、すぐにこの世から消えてしまうのではないかとずっと思っていた。

また、施設にいた当時、退所生で正社員でなくなり、落ちぶれた人のことを施設の職員さんがよく思っていないようだったので、「自分は落ちこぼれにならないようにしなければ…」というプレッシャーも重くのしかかっていた。

⑤施設との連絡

現在は、施設の職員さんと主にLINEのメッセージでやり取りしている。数日に1度程度。緊急的な用事で、すぐに返信がなかった場合は、施設の電話に連絡している。

施設を退所した後は、年に1度、退職した職員と退所者のつどいがあり、在園生も参加して、BBQなどをしているので、その交流会に参加していた。また、8月には地域のお祭りがあり、施設に行ったが、それ以外に施設に行くことはなかった。

結婚してからはこうした施設の行事にもなかなか行けなかったが、去年はタイミングがあったので参加したところ、職員さんに「相談してもよいのかな」と思った。今年になってから相談に乗ってもらって、協力してもらっている。

こうした退所生も参加できる行事を企画してもらえると、それに向けて日々の生活をがんばっていけると思う

⑥今回のプロジェクトについて

今年、離婚でばたばたしていた時に、職員さんから「こういう支援があるから、申し込んでもよいか？」という話があった。6月ぐらいに支援物資を職員さんと一緒に買いにいった。

コロナの緊急事態宣言や自粛生活で孤独感がより一層強くなり、不安やいらだちばかりが大きくなっていったが、お会いしたこともない方々が心配してくださったことに、あたたかさを感じた。

また、緊急支援金についての資料に「できれば、退所生と直接会って、支援金を振り込んだり、渡したりしてほしい」と書いてあったので、職員さんと会うことができ、嬉しかった。10万円という多額の支援は、生活が苦しい状況だったので助かった。

支援していただけただけで本当に嬉しかったので、改善してほしいと思った点は特にないが、強いて言うならば、もう少し提出レシートの対象期間が長いと、より有効に活用できると思った。あるいは、支援金を何回かに分けて支給してもらえると利用期間が長いからよいかもしれない。

⑦今後あるとよい支援

退所後にあるとよいと思う支援は、今回のように生活が困難になった時の金銭的な緊急支援。それから、フードバンク。できれば、食べ物を自宅まで配達してくれると助かる。施設の退所生は車や免許を持っていないことが多く、施設入所時に自転車に乗る習慣もついていないので、移動手段が徒歩・電車・バスのみであることが多いため、実際にフードバンクに行くことが困難だからだ。

また、傾聴ボランティアもいてくれると嬉しい。誰かに話を聞いてほしいが、今、それを施設の職員さんに全て背負わせてしまい、負担がかかってしまっていて非常に申し訳ないと感じるので。傾聴ボランティアは、施設の関係者であってもなくてもよい。直接会わなくても、電話が苦手なので、LINEでのやりとりがよい。

4) 都外の施設の自立支援コーディネーター

①施設について

昭和30年に創設され、今年で61年目となる。以前は小学校の近くにあったが、平成2年に学校から40分離れた現在のところに移転。田んぼに囲まれている。建物はすでに築30年となり、建て替えが必要となっている。

本園には、女子のユニットが2つと男子のユニットが1つある。また、地域小規模グループ・ホームとして、男女のホームが1ずつある。それぞれ、幼児から高校生までが一緒に生活している。最近では中高生の入所が増えている。

県内に児童養護施設は4カ所しかない。本施設は近隣6市と契約し、可能な限り地域の子どもたちを受け入れるショートステイも実施している。

私は本園に15年間勤務したのち、昨年4月から地域連携室に配属となった。場所は市役所の近くにあり、自立支援コーディネーターと家庭支援の担当、里親支援の担当の3人が配置されている。障害福祉分野の相談・支援は児童養護施設の子どもたちだけでなく、地域の人も対象としている。

本園が老朽化しているので、来年の夏から建て替えを予定している。公費負担が減っているので、中心メンバーの一人として、クラウドファンディングで資金集めも行っている。

②リービングケア（退所に向けての支援）について

◆実施内容

認定NPO法人ブリッジフォースマイルが発行した「ひとり暮らしのためのハンドブック 巣立ちのための60のヒント」を活用している。また、施設で地域にアパートを借りて、高校生が1日～1週間、ひとりで暮らしを体験する。

◆担当者

以前はホームごとに複数の職員がチームで取り組んでいたが、最近、個別ケースの担当制ができた。子どもの担当職員と自立支援コーディネーターとで計画・実施している。

◆外の機関との連携

大学や専門学校に進学しても不安定な子どもも多いので、進学先の担任とも打合せをしている。

県の社会福祉協議会の奨学金も活用している。これは在学中の2年間に支給され、卒業後5年間働くと返済しなくてよい。この制度を利用することで、7年間、県社協や施設とつながることができる。

また、県内には自立援助ホームが1カ所あり、退所後、子どもたちがそこに相談にいたり、ごはんを食べる会などに参加することができる。

施設には障害のある子どもも多く、退所前から福祉サービスとつなぎケース・カンファレンスなどもしているが、障害のない子どもたちに対しては、あまり支援ができていないと感じる。

◆家族との関係の調整

18歳で施設を出て家庭復帰するケースは減っている。この5年で5名以下。家庭に復帰した場合でも、親が子どもに関心がないこともある。上手くいっているケースは、退所前に家族と児童相談所と施設とでケース・カンファレンスを数回実施し、今までの経緯を

伝えながら、今後について話し合いをしている。

兄弟の家族と遠慮しながら暮らしている子どもが20歳の成人を迎えたときに、ACHAプロジェクトで袴を着せてもらい、家族を呼んで一緒に写真を撮ったことがあり、よい支援ができたのではないかと思う。

家庭復帰には児童相談所と連携している。担当者によっては、子どもの生い立ちの整理のために、絵本を作ってくれた人もいた。子どももそれを大切にしている。生い立ちの整理は児童相談所または施設で実施するが、方法が難しいので、施設職員全員ができるわけではない。

18歳で施設を出て、家庭に復帰しなかった子どももいるが、その母親に「お母さん、子育てお疲れさま」と声をかけたりしている。中には、子どもが施設にいる間に子ども手当を貯めていたが、家庭に戻ったら、それを親が使ってしまったというケースもある。その場合、再度施設に入るように児童相談所や施設が調整することもある。大切にしたいのは、子どもが施設に行くことを納得しているということ。子どもたちは自分でどうしたいかを言うことは稀だ。言っても無理だと思っている。親との関係で悩んでいる子どもに対しては、施設職員がその心に寄り添うようにしている。

③アフターケア（退所後の支援）について

◆日常的な取り組み

施設として20歳までアフターケアをすることを数年前に決めた。それまでは、職員個人の気持ちに委ねていた。この決定により他の職員からも理解してもらい、業務としてアフターに行きやすくなった。

退所前に子どもたち一人ひとりの「自立計画支援書」を作成し、本人と担当職員、主任と共有する。半年に1回は更新したいと考えている。ここには、面会の目的や頻度などが記載されている。子どもによっても違うが、最初は月に1回程度会うようにしている。

また、昨年からは、施設の子どもや職員の寄せ書きが入った誕生日カードを20歳まで送ることにした。施設にいる間は誕生日を盛大に祝ってもらえるのに、退所するとそうした機会がなく、その差が大きいことに気がついたからだ。

施設として20歳までアフターケアをしようと決めたのは、身寄りのない子どもが巣立っていくために必要だからだ。親からのひどい虐待で児童相談所に逃げ込み、在園中も自傷行為が激しかった子どもが退所した後、崩れていったケースもあった。こうした退所生に対して、心理士も関わって支援している。

なお、退所生と食事をしながら面会する場合は1人1,500円まで、月に何回まで、差し入れは1回1,000円までと決めていた。

◆イベントやイレギュラーな取り組み

また、退所生が参加する施設のイベントとしては、創立記念日のある10月に学園祭がある。お盆やお正月のイベントはない。学園祭は300名ほどの来場者でにぎわう。退所生も子どもを連れて参加している。今年はコロナの影響で実施できなかった。

◆コロナによる退所生への影響

このプロジェクトを受けなければ、退所生の変化に気がつかなかった。「コロナのために収入が減った」というような相談が退所生から来てはいなかった。このプロジェクトで

連絡したところ、いろいろ困っていることがわかった。

今朝、アウトリーチ・プロジェクトで支援した30歳を超える退所生からLINEで「電話で相談したい」という連絡があった。

④アフターケアの課題：

◆施設の課題

施設がアフターケアをする場合の課題はその財源。時間の捻出については、小規模施設であると難しいが、職員の連携でなんとかなる。現在、アフターケアの経費がないので、措置費を削って行うことになる。そうなると、面会の際の食事や差し入れの効果はどれだけあるのかを検証することになるが、なかなか効果を証明しにくい。

アフターケアをしていると、インケア（入所中の支援）やリービングケア（退所に向けての支援）がどのくらいできたのかという問題提起をされているように感じる。施設にいる間に、子どもたちの強みや弱みについて本人と一緒に確認し、退所後どうしたらよいかを話してきたかが退所後の生活を左右する。

先日、県内の4施設と心理治療施設にアフターケアの財源をどうしているかを聞いてみたところ、職員が経費を負担しているケースが多いことがわかった。

◆退所生の課題

自分はこうなりたいという気持ちがない子どもたちがいる。今回のアウトリーチ・プロジェクトで、心療内科の診察代を支援してもらった子どもからここ数日連絡がきているが、自分の復職についてどうしたらよいかかわからない。ドクターからはまだ休むように言われている。本人の気持ちを受容しつつ、施設にいる間に、社会で生きていく覚悟や社会に向かっていく準備ができればよかったと考えている。

◆専門機関との連携

アフターケアについて専門的に行うNPOとの連携が重要だと思っている。

施設にいる間に、退所に向けて、職員が何をめざして日々子どもたちと関わっていくのかを本人とも共有しておくことが必要であり、それをアフターケアのNPOに伝えられるとよいのではないか。

これは自分自身の反省でもあるが、子どもたちの現在の問題の原因は過去にあると考えていた。しかし、アフターケアの専門NPOは、退所後に3日～1週間程度しか会わなくても、その子どもの強みや弱みを把握するアセスメント力がある。そして、その子どもがこれからどう生きていけばよいのかについて、いろいろな選択肢を用意できる。施設職員もこうした力を身に付けられるとよいだろう。

県内の施設の子どもたちの進学率は低く、就労しても続かないという調査結果がある。働くイメージがないまま、職場に飛び込んでいるのが原因。そこで、県の社会福祉協議会と各施設の代表者が協力して中高生に就労体験の機会を提供している。小学生も見学できる。しかし、企業とよいご縁があっても、就労継続は課題。自分とのつきあい方を施設にいる間に身に付ける支援が足りないのではないか。

⑤今回のプロジェクトに参加して

◆退所生の状況

今回のプロジェクトは年齢制限や、「学生のみ」または「就労している人」という制限がなかったので、18歳まで施設にいて、連絡がつく人は全員に連絡した。

このプロジェクトがあったので、今まで連絡がとれていなかった人とも連絡がとれるようになった。また、何人かには実際に会って顔を見ることもできた。それぞれの退所生の成長と今抱えている困難を知ることができた。特に、2次支援としての緊急支援金を申請する時には、退所生がだいぶ深いところまで話してくれた。

例えば、夫婦ともに児童養護施設の出身の退所生に1次支援の救援物資を送った際は、本人のお金の使い方が悪いようにも見えた。2次支援の緊急支援金は家賃の補助に使わせてもらった。この件で夫婦の家で会って、いろいろなことがわかった。実は、夫の両親が何かにつけてお金を要求してくるが、「嫌われたくない」という思いから、それをはねのけられないということだった。こうした親子関係について、施設にいる時に親とのこうした関係についてもサポートできたらよかったと思う。その他にも、自分に自信がないので、親からお金をゆすられているケースもある。また、仕事の大変さについて話してくれた子どももいた。表面からは見えないことがわかった。

◆本プロジェクトの改善点

今回支援していただいた子どもたちが東京ボランティア・市民活動センターにお礼の手紙を書いたら、お返事をいただいた。プロジェクトの内容もわかりやすかった。遠慮ではなく、改善点は思いつかない。

この報告書のように、児童養護施設について社会に伝えていくというソーシャル・アクションが大切だと感じている。

例えば、虐待する親からの追跡がないように、住民票を児童養護施設に移せない子どもがいる。そのために携帯電話の契約ができなかったり、銀行口座が作れないということが起きる。児童養護施設の状況を知らない企業の支店レベルだと難しいが、本店だと理解があり、対応してくれるところがある。社会の人たちが児童養護施設について理解してくれることによって、こうしたハードルが少なくなっていけば、施設の子どもたちも生きやすいだろう。

最近、施設の子どもの状況を知れば、協力してくれる人たちがいることもわかってきた。このプロジェクトでのソーシャル・アクションに期待したい。社会に向けて動く人たちも重要だと感じている。

5) 都内の施設の自立支援コーディネーター

①施設の概要

子どもの定員は56名。ユニットは8つあり、本園に5ホーム38名、グループホームは3棟に18名いる。現在、4棟目のグループホームを作ることを検討中。創立してから今年で85年目。職員は45名（常勤職員）。

②退所に向けた支援（リービングケア）の状況

◆担当者

本施設の支援の特徴として、子どもの個別化・差別化（結果の平等化）と、生活をベースとした支援がある。『退所前だから、この時に、この職員が、この話をする…』というような、生活から取り出すことはしない。点ではなく、線で支援することをめざしている。子どものテーマ・課題ごとに子どもを集めたり、いろいろな職員が対応したりするのではなく、その子の生活全体を見ているホーム担当職員（生活支援スタッフ）がリービングケアについても担当している。そして、それをサポートするのが専門職であり、その中に自立支援コーディネーターも含まれる。

◆方法

昔は、退所へ向けて学年ごとに生活訓練をしていたが、今は、退所前だから何かを特別にするということはない。日々の生活の中で退所に向けて日々取り組んでいる。とはいえ、退所が近づいてきたら、ひとり暮らしをする場合は住むところの物件探しをするなど、現実的に即した動きを行っている。

家庭復帰の場合は、退所前に1LDKの間取りの多目的室を活用し、親が子どもに朝食を食べさせて、学校に遅刻しないように行かせるという日常生活を体験してもらう。休日の帰宅だけではイベント的な交流になってしまうことも少なくないため、退所へ向けて家庭復帰後の生活を想定した生活を子どもにも親にも、『ことば』だけでなく『体験』してもらうことを実施するケースもある。

退所する子どもたちがSOSを出せることが大切なので、施設にいる間に人に頼ることや失敗したときも誰かが一緒にいてくれるという経験をなるべくたくさんしてほしい。高齢の子どもが退所する時は、「私たちができることは少ないかもしれないけれど、困っているときは頼ってほしい。相談する先の選択肢の一つに入れてくれたら嬉しい」と伝えている。相談はなるべく早くしてくれた方が対応の幅が広がる。退所してから躓くと、施設に相談するのはハードルが高い子が多いようだ。自分が上手くいっているときは施設に連絡するが、困ったときは頼れない子が多い。子どもたちは自分の弱いところやしんどいところを見せたくない。「かっこわるい自分になっても大丈夫だから。頼ってくれない方が残念だから。音信不通にならないでね」と、“お願い”として伝えている。

◆外部の資源

家庭復帰の場合は、施設ファミリーソーシャルワーカーが児童相談所と共働をして支援している。特に虐待で施設に入っている子どもの家庭復帰後は地域での見守りが必要なので、退所前に関係機関と連携することが大切になってくる。困った時はどこに連絡したらよいのかを親子に伝え、退所後の情報提供やネットワークづくりをしているが、施設や地域とつながらない親子もいる。

自立のケースでは、就労自立の場合は、社会的養護の子どもの就労を斡旋している団体を活用して就労する子どももいる。

退所後に子どもが様々な思いから施設に相談しにくくなることを想定したり、施設だけに依存してしまう可能性を考え、複数の支援先があった方がよいので、アフターケア相談所の紹介を行ったり退所前に職員と活用してみたりすることもある。NPOなどの退所者支援の団体は増えてきたが、活用したことがない団体の場合は、活用したことのある施

設に様子を聞いてみるなど活用するに際して慎重になっている。都内の自立支援コーディネーターは隔月で集まって情報交換をしている。東京都全体で集まったり、6つの地域ブロックごとに集まる。ブロックだと地域も近いし、小規模なので、情報交換がしやすい。

③退所後の支援（アフターケア）について

◆日常的・継続的な支援

子どもの状況によって、ケースバイケースで対応している。子どもが大変な状況の時は毎日のようにメールや電話をし、その子の回復とともに間隔をあけていくようにするなどしている。普段の連絡は数か月に1回の連絡でよい場合もある。誕生日だけの連絡でよい子どももいる。子どもの状況や担当との関係性の中で頻度や方法も決まってくる。

高齢児になって家庭復帰した場合は、本人と直接連絡ができるが、低年齢の子どもだと、親を通してなので、本人と連絡をとりあうのが難しい。

◆イベント・イレギュラーな支援

以前は退所生が集まるような総会をしていたが、リスクもあり、子どもの課題や特徴は個別性があるので、全員集めるようなイベントを今はしていない。その子どものイベントに施設があわせる形だ。誕生日なので連絡して、会ってお祝いしたり、カードを送ったり、結婚式に呼ばれることもある。早急な対応が必要な場合もある。弁護士に相談したり、法人がお金を貸して、外部との関係を整理したり、子どもを施設に避難させるということもある。

インケア（施設内の支援）も全員参加のイベントは辞めた。職員と個別に旅行に行ったり、入所前に住んでいた地域やその子が行きたいところに行くなど、子どもの希望や目的をもった支援としての個別のイベントを行っている。アフターケアも個別の支援にしている。全体での集まりだと、退所生同士の力関係を職員も把握しきれず、巻き込んだり巻き込まれたりすることがある。加害・被害の関係だと、加害者の子をそのイベントに呼ぶことはできないなど課題が大きい。

退所の時に、入所生との関係や退所生同士の関係について、お互いに気持ちよいものであるようにと伝えている。「トラブルに巻き込まれたり、巻き込んだりしないよう気をつけて。自分の人生のことをよく考えて付き合い方を決めてほしい。もし、退所生同士でトラブルがあったり、断れないということがあれば、相談してね。」と話している。最終的には本人が判断するが、自分にとってプラスの関係かどうかを考えるようにアドバイスをしている。

◆アフターケアの課題

インケアもアフターケアも個別支援なので時間がとられる。子どもが退所後に支援してほしいのは苦楽を共にしてきた担当職員だが、その職員はインケアだけでも多忙なので、時間外での対応になってしまう。そのため、アフターケアは担当職員の気持ちに頼っている部分が多い。担当職員が忙しくすぐに時間を作れなかったり、退職してしまったりしている場合などは、自立支援コーディネーターの自分に対応している。アフターケアにバラつきが出ることもある。その他、課題はたくさんある。

◆コロナの影響

今までも退所した子どもたちに連絡をしていたが、今回のコロナによるアフターケアで、

子どもたちはSOSを出すことが難しいことに改めて気づかされた。特に、大変な状況のまっただ中ではSOSは出しにくいことや、聞き方や聞くタイミングが重要であることを再認識した。

定期的に連絡をとっていた子どもだったが最近電話をしてきて、正社員で働いているが、コロナの影響で6月は給与が一桁だったことがわかった。今回のプロジェクトで、その子に連絡をとったときは大丈夫と言っていたが、実は、貯金を切り崩して生活していたようだ。連絡がとれているから大丈夫かと思っけていても。表面上のことばや健やかさで判断してはいけないということを改めて思い知った。

④退所生への支援の難しさ

退所生にやってあげられることはとても少ない。連絡を取り合える関係性を保つことが一番大切だとは思いますが、いざ、子どもが頼ってきた時に、施設では対応できないことが本人の一番求めていることだったりする。例えば、保証人になってほしいという相談がある。お金が必要だというときも施設としては殆ど対応できない。公的機関と一緒に出向くこともあるが、公的支援の範疇ではない状況もある。そのようなときは、何もできなくて、本当に申し訳ないと思う。本人も施設で対応できないとわかっている（諦めている）ので、施設を責めたりはしないから、それがまた辛い。

⑤今回のプロジェクトについて

このプロジェクトがあったおかげで、会うことができた退所生がいる。他の退所生とのトラブルをきっかけに、施設に対し『恩を仇で返して申し訳ない』と言い残し施設との関係性を絶ってから4年になるケースである。その間、返信がなくても、自分から毎月1回は「どうしてる？」とメールを送るようにしていた。今年になり、その子から4年ぶりにメールの返事があった。ただ、こちらが焦って関係を戻そうとすると、せっかく本人が勇気を出して連絡をくれたのにまた離れてしまいそうなので、アプローチに慎重になっていた。しかし、その子もコロナのために金銭的に困っていたので、このプロジェクトの緊急支援金の話をしたら、本人がそれを受け入れて、4年数か月ぶりに会うことができた。想像より早く会ってもらえた。

支援できることがあれば、それを理由に堂々と会うことができる。連絡しても何もできないよりは、支援できるものがあつた方がよい。4年間手を差し伸べることができなかったもので、ありがたかった。

退所生へのアプローチは根気があることだが、なかなか反応がなくても、子どもたちの心情を想像しながら、連絡を取り続けたいと思う。ありがたかったのは、今回のプロジェクトは施設を通しての支援だったことである。これがきっかけで退所生にアプローチでき、また、退所生が自ら支援団体に連絡しなければいけないと、そこまではしたくないという子どもたちもいる。子どもたちも「知らない人たちとやりとりをしなくてもよいことが嬉しかった」と言っている。

また、アンケートは退所生への負担になることも多いが、本プロジェクトのアンケートは退所生の負担にならないように答えやすい形式だった。退所生に配慮してくれていることがわかった。また、支援によっては複雑で、説明書を読み込まなければいけないものも

あるが、本プロジェクトは何をするのかが明確だったので、職員への配慮もしてくれていたように思う。

⑥今後の希望すること

もし、できるのであれば、今回のプロジェクトの申請時期を逃してしまったケースが多かったので、通年で申請できるような基金があり、アフターケアに使える資金があると、より有益である。支援が必要なタイミングが子どもによって違うからだ。

また、最近、有名人の自殺というニュースが相次いだ。施設の子もたちのように心に傷を深く負っていると、ぎりぎりのところで生きている。その有名人のファンでなくても、無意識に影響を受けてしまっているのが、施設の子もたちの様子を注意深く見守るようにした。退所生はもっと孤独なので、社会情勢の影響を受けやすい。アフターケアでは社会の動きも気かけなければいけないと思う。しかし、できることは少ない。担当職員の負担も増える。イベント的なケアだと楽だが、個別の伴走型支援をしたい。今は、担当職員のボランティア意識に頼っているが、担当職員がインケアもアフターケアも両方できるように、担当職員1人が見ている子どもの数がせめて今の半分に減ると、もっと丁寧なケアができるのではないかと。

自分たちが想像する以上に過酷なことを経験してきた子どもたちを、自分が『丁寧だ』と感じる何倍も丁寧にケアしないと届かない。どの子どもも、子ども時代を子どもらしく生きられる世の中になってほしい。支援は、インケアとアフターケアのどちらかではなく、その子の入所前の状況、親との関係、その親の持つ背景というように、点ではなく線で考えることが必要である。

多くの一般家庭の子どもたちは、自分もそうだが、親元離れてからも時々家に帰り、「子ども」をさせてもらって、少しずつ大人になっていく。施設の子もたちはそれができない。特に何の後ろ盾のない退寮生に対して施設が実家のような機能も果たせたらと考えるが、ハード面含め課題が多く、実家として機能させられていない。施設の子もたちは、すぐに大人にならなければいけない。失敗するとまるで全てが終わってしまうような状況を生きている。

今のアフターケアはいろいろ足りないが、やれることを探して、やるしかない。施設に連絡くれる子どもには感謝している。連絡とれない子どもたちはどうしているか気になっている。

6) NPO法人 NPO STARSのメンバーへのグループヒアリング

①リービングケアについて

◆施設A

退所後の支援担当者はいないが、退所前に担当した職員7～8名が窓口になって対応している。退所する1年前に複数の職員とつなぐようにしている。お金、薬、体、食事など、テーマごとに担当がいて、退所生はその職員に連絡する。

本県では県と社会福祉協議会が主催し、中学校・高校の時から仕事体験ができ、そこで知り合った中小企業に就職している子どももいる。

障害のある子どもは障害福祉施設につなぐことができるが、それ以外の子どもは施設外

◆施設A

退所後に定期的に連絡している。最初は週1回程度、落ち着くいてくると月1回程度。バナナの買い方を相談してくる退所生もいる。相談する子はしてくるが、自分が困っていることを困っている時に相談できない子もいる。問題が大きくなってしまってから、介入することもあるので、連絡はこまめにとらないといけないと考えている。退所してから何年まで連絡するのかが検討課題になっている。

今回のプロジェクトで19名を支援した。過去7年ぐらいまでさかのぼって、最近連絡がとれていない子どもにもつながった。コロナで仕事がなくなった子もいた。退所してから年数が経てば経つほど、施設に相談しにくいので、今回のプロジェクトがよい機会になった。その後、子どもたちから連絡が頻繁に來たり、これを機に連絡が取れた子もいる。

高校生の時に2～3年だけ施設で生活して、退所した子どもへの支援が難しい。今まで電話にも出なかったが、さすがにコロナで仕事が全くなり、部屋に籠っていたので連絡が取れた。このプロジェクトで、物品と緊急支援金10万円を届けた。生活費がなくて、貯金も切り崩していたので、家賃と食費に使った。その後、仕事も決まって、今、2か月目になり、ようやく生活が整い始めた。その子には、毎週少しずつお金を渡すようにしたので、お金が足りないと電話をしてくるようになった。誰かに相談してよいということを経験的に学べたのではないか。

◆施設B

コロナ下では、子どもたちが学校に行かないで施設にいた。また、コロナを持ち込まないために職員は外に出れないという状況だったので、退所生とはLINEでやりとりをし、家庭訪問はできなかった。ある退所生は外食産業に就職したが、試用期間が長かったので、コロナが落ち着くまで正規採用が遅くなり、その間は社会保険に入れていなかった。

退所生への支援の難しさは、担当職員との個人的な結びつきに委ねている面が大きい事である。インケア（退所前のケア）であればケース・カンファレンスをして、予防的な支援ができたり、実践の振り返りができるが、アフターケアの場合は、退所生が困ってしまってから、その情報が入ることが多く予防的に手を打つことが難しい。

チームとしてアフターケアができる体制を組みたい。退所生から小さな困りごとの段階で連絡がくるようになるとよい。例えば、子どもが施設を出るときに、児童手当や措置費の支度金、民間企業の奨学金等を含めて、ケースによっては100万円以上の大金を持たせることがあるが、自分では管理できない。本人は「だいじょうぶ。」と言うが、お金を使ってしまうと身動きがとれなくなってしまうケースもある。退所後の財産管理は大きな課題である。遺産等莫大なお金が入ってきた場合は弁護士さんに未成年後見人になってもらう場合もある。

今回のプロジェクトでは退所後5年以内に絞り、10名の退所生を支援した。このプロジェクトでは退所生と頻繁に関わる機会があったので、生活状況を把握しやすく、必要な支援がわかった。退所してから5年以上でも連絡はとれるが、現状の生活把握まではできていなかった。こうした緊急の支援について退所生にどう説明するのが難しい場合もある。退所生が家庭を築いていて、施設から連絡してほしい人か施設にいたことをパートナーに伝えていない人もあるため連絡を取る時に慎重さが求められる。

の資源につなげられていない。進学の場合は大学や短期大学、専門学校の相談室に事前にあいさつに伺っている。資源の開発はまだまだできていない。

家庭に復帰する場合は、保護者と子どもと職員の3者で約束事の確認や家族関係の調整をしている。

◆施設B

退所時は家庭支援専門員や所属する棟のチーフと子どもの担当職員が関係機関との調整や退所の準備などを進め、複数の職員が関わっている。

施設外の資源としては資生堂財団の主催する自立支援セミナーに高校3年生が参加している。県独自のものでは、高校生全学年を対象に県が主催するキャリアカウンセラー講座に参加して退所生の体験談や一人暮らしに何が必要かを学んでいる。

児童養護施設を出て大学に進学することは、今では普通になってきたが、大学生活と自立生活の両立が大変なので、20歳まで措置延長して施設にいられるようにし、児童相談所や保護者と相談しながら、学校生活に力をそそげられるようにサポートしている。しかし、20歳の誕生日には措置解除となるため県の社会福祉協議会の自立支援資金の貸付制度を利用している。

高校を卒業して、就職した子どもたちもこの貸付事業を利用しており、施設がアフターケアの窓口となっている。就職先とも施設にいる間に話し合いをもつようにしている。企業側が児童養護施設の子どもの雇ったことがないので、いろいろ説明しながら、企業の人と一緒に仕事と生活を支援している。

特別支援学校の子どもは、就労・生活支援センターの担当ワーカーに入ってもらって、仕事と生活の両面でサポートしてもらっている。ただ、センターとはそれまでの子どもとの関係性がないので、当分の間は施設職員がセンターの職員と一緒に家庭訪問をしたりして、支援している。

高校中退の子どもたちも多い。15～16歳の子どもたちは未熟なので、中退しても18歳までは施設でケアしたい。そこで、定時制に入りなおして、施設で生活をしながら、時間をかけて自立の準備をさせるようにしている。

県のアフターケア事業の委託機関があり、2週間、一人生活を体験することができる。施設職員も訪問し様子を見ることができる。また、本県には、就労に向けて職親プロジェクトがあるので、就労体験をすることも可能。最終的には本人が体験先に就職するかどうかを決めるが、職親は住む場所も提供してもらえる。

家族の関係支援については、措置解除後でも18歳までは児童相談所と協働し、18歳以上はアフターケア機関と一緒に施設が実施している。

資源の開発はまだあまりやっていない。既存のものを活用して進めている。

◆施設C

本施設では自立支援コーディネーターが中心となり、子どもの担当者や施設長、家庭支援専門員、調理担当などが複数で支えている。例えば、調理担当が子どもたちの好きなメニューの作り方を教えたり、健康担当が今後の投薬管理などを指導している。

施設外の資源としては、財団や企業などによる進学ための奨学金を利用している。施設に在籍中にNPOの自立支援プログラムにも参加し、退所後もそのつながりがある。施設にも連絡があり、いろんな人に支えられているのがよいと思う。

最近、発達障害があり、退所後に福祉分野の通勤寮やグループホームにつながる人が増えている。未成年後見人を決めてもらい、退所後、サポートしてもらっているケースもある。また、地域の障害福祉課とも退所前につながっておき、本人が誰に頼ればよいかわかるようにしている。

特別支援学校は卒業後も支援がしっかりしている。

高校中退の子どもに対しては、定時制の学校や通信教育などに再チャレンジしている。

家族との関係の支援は、退所の前に家族・親族と児童相談所と施設とで会議を開いている。自立の場合は保証人や携帯電話の親権者、学費の管理などをどうするかについて、親子だけで話し合うのが難しいケースもあるので、児童相談所や施設が入り、役割分担を決めている。

◆施設D

子どもたちは担当職員に愛着があるので、子どもが選んだ職員を退所後の主担当にしている。若い新しい職員と小さい頃担当していたベテランの職員がペアとなり対応する。担当していた職員が退職した場合は、長くいる職員が対応するようにし、子どもとのつながりを保ち、子どもたちから施設に連絡しやすいようにしている。

自立に向けては、食事づくりも子どもたちができるように、買い物を職員と行っている。また、高校生のグループワークを月1回実施し、心理士と主任が入る。高校の学年ごとに実施したり、全学年で実施することもある。そこでは、施設にいることでの悩みや施設を出ることでの不安について話し合ったり、職員が、お金の使い方や人間関係の作り方などを話したりしている。

年に1度、退所生を呼んで、進学や子育て、就職、転職などで、どんなことに苦労したのかを、失敗談も話してもらいながら、どうやって、そこから立ち直るかといった話をしている。施設の先輩という身近な人からの話は子どもたちに伝わりやすいようだ。

NPO STARSの自立支援セミナーにも参加し、印鑑の取り扱いなど、いろいろなテーマで、他の施設職員から話してもらっているのもよいようだ。

施設外の資源としては、地域小規模グループがある地域の子ども会に参加しているので、子ども会の大人たちが声をかけてくれる。退所生は施設にはこないけれど、地域のまつりに参加していたりする。犬や猫の好きな子はお散歩仲間ができて、そのご家族から食事に誘ってもらったりしている。また、野球チームやサッカーチームの監督が連絡してくれている。このように外の団体に入ることも大切だと感じている。

県の独自事業として、民間のアパートを借り切って、ケースワーカーが付いた施設がある。月額何千円かの家賃を払えば利用できる。大学や専門学校に行く場合は、20歳までは措置延長し、その後は、この施設へ移るといろいろ相談ができる。

親がいない子どもたちは、未成年後見人と入所中につなげておき、退所した後も未成年後見人から連絡が来るようになっている。

退所した子どもたちが、本児童養護施設と同じ法人が運営している高齢者施設で働くこともあり、その場合は職員寮が利用できる。

進学する子どもたちに対しては、大学・専門学校の事務担当者につながるようになっている。各大学の奨学金もできてきたので、手続きの仕方を教えてもらったりしている。法人独自の奨学金もあり、学費だけではなく、生活費も支援している。親が家庭ひきとりを希

望しているけれど、家庭から学費を出す経済的余裕はなくても、家庭に戻ってしまうと児童養護施設の子どもたちのための奨学金は使えないので、当法人の奨学金を利用している。

また、退所する前に小さい時から、生き立ちの整理をしておくことが必要だと感じている。

◆施設E

本市では平成30年度から自立支援コーディネーターを配置した。本園は現在、自立支援コーディネーターが家庭支援専門員を兼任しており、退所生が親との関係が上手くいかなくなった場合にも相談を受け、対応している。

施設外の資源は、その子どもの必要に応じて紹介している。退所後は人とのつながりが必要。某協会は7カ所の青年センターで月1回食事をとりながら、子ども同士の交流の場を提供している。企業からも奨学金や生活費の援助をしてもらっている。

高校中退の子どものための通信制の学校が増え、希望者もいる。学校に通いながら、施設で自立をめざしたい子が多い。アルバイトが続かない子も多いが、企業の住み込みもある。しかし、市外である為慣れない環境もあってか、姿を消してしまうこともあり、施設を出て、上手く仕事につながるものが課題である。

◆施設F

本県では職業指導員を配置しており、自立支援コーディネーターの代わりとなっているが、県内の全施設に配置されているのではなく、2施設のみ。退所生には、担当をしていた職員が主に支援しているが、長く勤務している職員がみんな関わっている。

施設外の資源としては、特別支援学校が徒歩圏内にあり、ここに通う子どもたちも多い。彼らの退所後は、グループホームや市の障害担当や社会福祉協議会と連絡をとりながらサポートをしている。

また、アフターケア相談所が1カ所ある。施設および里親の子どもたちを対象として、企業との面接やインターンシップなどを実施している。中小企業同友会が就職先として協力してくれている。このアフターケア相談所が退所生に定期的に連絡してくれるので、施設にいる間にこの相談所とつながっておくようにしている。特に、発達障害やコミュニケーションの問題のある子は早めにアフターケア相談所に相談している。ただこの相談所も県内18施設を担当し、業務過多なので、施設もアフターケアを行っていくことが必要だと思う。

退所後、家族復帰して好転するケースは少ない。高校まで施設にいて、その後は自立することを希望する子どもたちが多い。親には就職の保証人にはなってもらっている。

②アフターケアと今回のプロジェクトについて

◆施設F

退所生へのアフターケアとしては、職業指導員が個人の携帯ではなく、施設の携帯でLINEのやりとりを月1回している。また、今年から業務として、訪問も月1回実施する予定だったが、新型コロナウイルス（以下、コロナ）のために退所生の訪問ができないでいた。退所して半年も経たないうちに、大きな借金ができて子どももいる。

今回のプロジェクトでは退所した20名とコンタクトを取った。このプロジェクトがあったから、全員に電話で連絡がついた。今のところ、大変な状況の子どもたちはいなかった。

◆施設C

施設独自の奨学金がある。外国籍の子どもの場合は、退所後の在留資格申請の支援も行っている。今回のプロジェクトでは17名に支援物資を送り、緊急支援金で3名を支援することができた。コロナの状況等により、仕事ができなくなった2人と、進学したがバイトができなくなった1人だ。緊急支援金の10万円は彼らの生活の立て直しができ、彼らと連絡をとるきっかけとなった。

このプロジェクトに参加し、より積極的に退所生の状況を把握しようとした。退所生の困っていることはさまざまだった。「話を聞いてほしい」、「お金がない」、「収入があるが、公共料金の支払いができていない」、「助成金の申請の仕方がわからない」など、個々のニーズがわかり、今後のアフターケアに活かすことができるよいきっかけになった。

◆施設D

退所生が自分ではお金の管理ができないので、本人の希望で、施設にいた頃に貯まった子ども手当が入っている通帳を施設が預かっている。大金を持つと、タクシー代など、すぐに使ってしまう子どももいる。施設で通帳を預かっている子は、施設に来てもらって話す機会があるので、いろいろなことで悩んでいることがわかる。

例えば、退所生が子育てをしていると、自分のトラウマが表出してきて、「子どもはかわいけれど、このしかり方は虐待だろうか。」という相談の電話がくることもある。コロナ下ではこうした不安が増す。今回のプロジェクトを利用した退所生が電話をくれるようになった。

支援物資を送付する20名をどう選ぶかについて、主任の間で話し合い、一番苦労していそうな子で、連絡がとれる子やアンケートを返してくれそうな子を優先した。選んだ子以外の子どもたちも困っているかもしれないので、これからどう関わっていけるかを検討しているところだ。

退所生の中にはプライドがあり、「施設の退所生扱いされたくない。もっと困っている子にあげてほしい」と、言う人もいた。

今回のプロジェクトでは、支援物資の資金とともに、施設の追加支援ができるための2万円の資金もあったので、今まで退所生に会いに行く交通費や食費代は職員が自腹で払っていたが、この資金を使っ子どもたちと会って、困っていることの相談を直接受けることができた。この資金で子どもの電車代も出すことができたと言った職員が喜んでいる。アフターケアのためのお金の支援はありがたい。退所生と会って支援したいが、職員の自腹だとなかなかできない。

◆施設E

退所生の支援としては、連絡が入ったときにゆっくり話を聞くようにしている。施設のまつりを年に1回、土曜日に開催して帰りやすい環境を作り、退所生も同窓会気分が集ってくる。

経済的な支援については、施設独自の基金がある。子どもたちには、「返せるときに返してね。」と伝えている。すぐに返せる子もいれば、毎月千円ずつでも返す子もいる。コロナ下では外に出られず精神的にめいってしまったという連絡が多かった。入所している子の親が経済的に厳しいという連絡もあった。コロナ下で、進学するのか、就職するのか、進路選択を悩んでいる子どももいる。

退所生の中には「困った」と言えない人がいて、音信不通になっている場合が多い。過去には自死してしまったケースもあった。どんな形でもよいので、施設に相談できるような関係性を作りたい。

③今後のアフターケアに向けて

◆施設E

退所した子どもたちがSNS等を含め、お互いに繋がっていることで、支援対象の範囲を決めるのが難しい。今回のプロジェクトでは、携帯を持ち始めた平成元年以降の35名に声をかけた。10万円の緊急支援金で1人を支援した。居酒屋で働いていたが、コロナの関係で仕事がなくなってしまった退所生だ。

施設が退所生に食料などの物資を送る「実家便」は年齢の制限があったり、グループホームに入っている子は対象外となっているが、今回のプロジェクトは退所生の制限がないのがよかった。昔に退所した人ともつながれた。条件のない支援の必要性を感じた。

◆施設D

子どもたちが施設に依存するのではなく、必要な時に連絡がとれるようにすることが大切だと思う。退所生には担当職員の個人の携帯で連絡をしているが、難しい子どもは施設の電話で連絡している。今回のプロジェクトを通して、退所生にもっと積極的にアプローチすることの必要性を感じた。施設では年に1度、バザーがあるので退所生が来る。その際に連絡先を書いてもらい、クリスマスにカードを送っている。施設とのつながりをもちたい子はバザーに来る。40歳すぎてもつながりを求めて来る人もいて、対応していく必要がある。

◆施設A

職員の個人の電話番号は教えない。入所している子どものケアもある中で、退所生にいつまでアフターケアをするのが課題となっている。また、子どもたちが頼れるところを施設だけにしないことも大切だ。職場関係や新しい生活のところに頼れる人を作り、困ったときは身近な人を頼り、その人たちに言いにくいことは施設へ相談するようにして、頼れるところをたくさん作りたい。

◆施設B

職員の携帯番号を退所した子どもには教えている。子どもとの関係のなかで、施設には直接相談するまではいかないが、職員個人には気軽に相談できる場合が多いため。しかし個人携帯の対応は場合によって負担にもなりかねないため、施設の携帯があり、職員が相談に使えるようになるとよい。退所生からの相談内容は職員間で共有し、その職員が抱え込まないようにしている。施設でできる支援には限りがあるので、すぐに動かなければいけない支援についてはアフターケア事業の委託機関にお願いし、役割分担することが必要だと思う。

今回のプロジェクトは即時性があった。希望としては、コロナ下での緊急支援だけでなく、コロナ下でなくても困ってしまった時に現金で支援することができるような、いつでも利用できる基金があるとよい。

今回のプロジェクトはあまり制限がなく、施設の裁量で使えた。普段からアフターケアに体系的に取り組んでいる施設は支援の厚みがあったが、職員が個人でしか退所生と繋

がっていない施設は、プロジェクトの自由度が高すぎて、どのように使ったらよいかわからず申し込まなかったのではないか。そういう施設には資金使途のガイドラインや好事例を紹介したり、コーチングができるとういのではないか。

◆施設D

施設がアフターケアに使える2万円の使い方がわからないところがあった。レシート
の提出が必要なのか、いつまで使えるのか、残った残金はどうしたらよいか等、もう少し
説明がほしい。

◆施設C

いきなり緊急支援金を渡すのではなく、まず、支援物資のパッケージを送ったことによ
って、子どもたちのいろいろな状況が見えてきた。コロナで仕事がなくなった、アルバイト
がなくなった等、本当に大変な子どもには緊急支援金を申請した。まず支援物資を送った
ことによって、その後の支援につなぐきっかけになったように思う。

◆施設E

このプロジェクトの最初の案内が来てから、申込期間が短かったので、ケースの洗い出
しができないと思ったが、その後、締め切り延長の案内が来たので応募できた。申込が間
に合わなかった施設もあるのではないか。また、今回、応募しなかった施設は、既に施設
で「実家便」を送っていたり、該当する退所生がいないというところもあるかと思う。

3. ヒアリング調査を終えて

【報告と分析】法政大学 現代福祉学部・人間社会研究科 教授 岩田美香

1) 退所生へのヒアリング

①入所の背景と退所後の生活

退所生へのヒアリングでは、子育てをしている女性、大学生の男性、勤労者の女性という三人から、お話を聞くことができた。いずれも、施設入所に至る理由となっている家族との関係や生活の困窮が、施設を退所した後の生活にも影響を及ぼしている。

子育て中の女性は、実母の精神的な問題と離婚の繰り返しや就学前の施設利用、また祖母に引き取られた経緯などもあり、子どもながらも落ち着かない生活を送っていたと推察される。そうした生育歴にあっても、高校3年生の時に社会的養護に繋がる際には、「高校を卒業したい」という強い気持ちがあり、それを実現するために児童養護施設に入所している。施設退所後は、結婚し2児を育てているが、夫が浪費家で離婚を考えたこともあるなど、平穏な日々ではない。さらに実母の自死という凄まじい経験もしているが、その時は子どもの存在に支えられたと言う。

彼女の夫の仕事は、早朝から深夜までの勤務状況で、会社から「仕事に必要なもの」という名目で給与が差し引かれ、それをボーナスで返還するという約束も守られていない。彼女自身の仕事も、保険の営業に加えて、夜間と週末にファーストフード店でバイトを行い、ダブルワークで生計を支えている。そこへコロナ禍による大幅な減収と、保育園が利用できない事によって在宅で子どもを見ることとが重なり、家事と生活のやりくりにもストレスを感じている。自身の友達とも遊ぶこともできず、ストレスをどのように発散したらよいのか悩んでいる。子どもたちとは、お金のかからない工夫をしながら遊んでいるが、「子ども好きであっても心に余裕がないとだめだと思う」と言うように、生活が逼迫していることが、子育てにも影響してくると話していた。

大学4年生の男性は、母子家庭の貧困という理由で4歳から9歳まで施設に入所しており、現在は施設の近くの公営住宅に母親と二人で生活している。彼は、塾も使わず、高校の先生や友人、そして無料の学習支援を活用しながら勉強を頑張り、成績もよいために第1種の奨学金も利用している。しかし、大学進学の際の学費など、金銭的な困窮を経験している。また、生活保護も受給していたが、受給を廃止するための数か月間の生活も大変だったという。就職の内定も得ているが、卒業に向けた研究が忙しいために、現在、アルバイトはしていない。

コロナ禍により母親が失業し生活が困窮した。奨学金の他に、大学の授業料一部免除や区の緊急給付金で何とか生活できているが、オンライン授業に伴う経費なども発生している。

勤労者の女子は、親の貧困とネグレクトにより2～18歳まで施設に入所していた。高校を卒業し退所した後は、寮付きの福祉施設で働いたが、摂食障害を発症し退職に至って

いる。私生活では、元夫が仕事もせず、お金を搾取した上、彼女の名義で多額の借金もついで離婚している。現在は一人暮らしで、風俗店で働いている。母親やきょうだいはいるが、関係が悪く疎遠となっている。

コロナ禍によって仕事が減り、客から病気を移され、収入減にともなう無茶な節約で摂食障害を再発している。

②施設との関わりと支援

ヒアリング調査に協力してくれたということもあり、三人とも施設との関わりが取れている。それでも職員に対して相談しづらい状況や、反対に施設職員と繋がることになった経緯など、彼らのエピソードからは、多くの示唆が得られる。また、本プロジェクトの運用に関しては、「施設を通した」実施が大きなポイントとなっているようである。

子育てをしている女性と施設との関わりでは、季節ごとに、また彼女の誕生日や施設の学園祭に声をかけてくれる職員の存在が大きい。それでも、「(自分が) 調子のいいときは話せるけれども、困った時は話せない」と語っているように、支援が必要な困っている時に相談をするということは高いハードルとなっている。

今回の支援物資では、特に食料品が助かったが、心理士や職員が子ども服や手作りマスクなども一緒に自宅にもってきてくれたことを喜んでた。要望する支援としては、子どもを産んだ後の子育て支援について語っていた。プロジェクトの支援金により、「食事をもやしにして電気を消す」といった生活が回避できている。子どもには、自分の幼少期のような困窮した生活をさせたくないが、仕事時間を増やすと子どもとの時間が減ってしまうというジレンマもあり、国の就労支援と子育て支援に対する不満も述べていた。

大学生の男性は、施設から近くに居住していることもあり、施設とは頻繁に電話連絡をしたり、イベントの手伝いに行っている。入所当時の職員は辞めてもいても、イベントなどを通して他の退所生や職員との繋がりをつくっている。

今回の支援物資では、やはり食料品が助かったが日用品も希望していた。支援金は、支払いがギリギリだった学費の残金に充当した。要望する支援としては、自分自身の経験から、より安定した職に就くために施設出身者へ大学進学への支援を行うことや、学生のアルバイトが見つからない現状から、アルバイトの斡旋や情報提供の支援について語っていた。

勤労者の女性は、施設の規模が大きかったため、一人暮らしを始めた時には、自分は既に退所した立場であり、実家にも頼れず誰も助けてくれないのではないかと「表現するのが困難なほどの孤独感」を覚えたという。施設を退所する際には、担当職員から「困ったことがあったらいつでも連絡を」と言われてはいたが、入所中に、先輩である退所生の「落ちぶれた」状況を職員が良く評価していないと思い、自分が「落ちこぼれにならないように」というプレッシャーも感じていたと言う。職員には頼れないと思っていた彼女が、施設と繋がるようになったのは、年に一度の退所生の集いや地域の夏祭り（施設から花火が見られる）である。久しぶりにイベントに参加する機会があり、「職員に相談してもよいのかな」という気持ちから相談がはじまり、現在は数日に1回程度、職員とLINEでやり

取りするようになってきている。こうした行事や企画が行われることは、退所生にとっても、その日程に合わせて日々の生活を頑張っていけると話していた。

今回の支援プロジェクトでは、支援物資も職員と一緒に買い物に行き、緊急支援金についても職員と直接に会うことが嬉しかったと語っている。10万円は、本当に苦しい生活の助けになっていた。あえて述べた運用上の改善点としては、レシートの提出の期間が短すぎることをあげていた。

さらに今後に向けた支援としては、緊急的金銭支援や、食料品の宅配（2週間に一度か、月に一度ぐらいの間隔で）があげられた。退所生は車や運転免許を持っていない者が多いのでフードバンクに行くこと自体が困難になっているという。また、施設職員に限らない傾聴ボランティアも希望していた。強い孤独感を感じていたからこそそのニーズであり、電話が苦手ということもあるので、LINEによるやり取りを希望していた。メールやLINEは、多方面における相談のツールとして取り入れられてきているが、支援される若者にとっても、今後の繋がりする方法として使いやすいものとなっている。

2) 施設職員へのヒアリング

施設職員へのヒアリングは、東京都外と東京都内における施設の自立支援コーディネーター各1名ずつに話を伺った。両施設ともに退所生への支援の充実に向けて様々な改善を図っているが、東京都外の施設は施設全体として行う支援を整えているのに対して、東京都内の施設は施設全体のイベントは廃止し、子ども一人ひとりに応じた支援を行うという特徴をもっている。しかし両施設ともに共通点も見られる。例えば、退所生へのアフターケアは施設入所中のインケアやリービングケアの質と繋がっているということ、また、退所生への「支援」をするために、その後ろ盾となる資源を必要としていることなどである。

①退所に向けての支援

東京都外の施設における退所に向けた支援では、子どものホーム担当職員と自立支援コーディネーターによって計画・実施され、子どもたちの進路となる学校や社会福祉協議会、自立援助ホーム、アフターケアを専門的に行うNPOなどと連携して展開されている。数年前に施設として「20歳までアフターケアする」ことを決めただけで、業務として出向きやすくなった。退所前に「自立計画支援書」を作成し、本人・担当職員・主任で共有した後、半年に1回は更新していく。退所した当初は、月に一回程度は面談することや、20歳までの誕生日カードを送付すること、そして退所生との食事や食品の差し入れについての回数と料金の規定もでき、職員個人の対応ではなく施設として対応するように整ってきた。

18歳で施設を出て家庭復帰するケースは減っており、親の無関心や親による子どもへのお金の無心など、子どもが家庭復帰して残念な思いをした事例も見られた。一方、家庭復帰が叶わない子どもに対しては、20歳の成人式ACHAプロジェクトや、児童相談所との連携による生い立ちの整理も大切である。

アフターケアをしていく中での課題としては、アフターケアを実施する財源の問題がある。さらに、インケアやリービングケアの中身が退所後の生活を左右するという、施設内

での支援についても問題提起もされているように感じる。また、関連するNPOのアセスメント力の高さと支援の確実性から、施設職員の力量も問われている。

都内の施設では、施設全体として子どもの個別化と生活ベースの支援を目指している。従って、リービングケアも子ども生活全般をみているホーム担当職員が担当し、それを自立支援コーディネーターを含めた専門職がサポートする体制をとっている。支援は入所前の状況や親との関係、親の背景といったように、点ではなく線で考え、支援も点ではなく線で展開することを目指している。家庭復帰の場合は、ファミリーソーシャルワーカーが児童相談所と連携し、自立の就労支援の場合は子どもの就労を斡旋している団体を活用している。NPOなどの外部の退所生支援団体は増えているが、活用には、その団体についての情報収支を通して慎重に活用している。また、子どもたちがSOSを出せることが大切と考え、インケアの段階から、人に頼ることや失敗しても誰かがいてくれるという経験を重ねられるようにしている。

アフターケアにおいても、その子の状況や状態に応じて、繋がるツールと頻度は決まっていく。インケアにおけるイベントや旅行も同様に、全体ではなく子どもの要望に応じて個別対応で行っている。アフターケアの課題としては（インケアの課題でもあるが）、個別支援により職員の時間が取られることと、職員間によるばらつきがみられることである。

②今回の支援について

都外の施設による今回のプロジェクトの感想としては、年齢や属性などの制限がなかったことを評価している。その結果、18歳まで施設にいた者全員に連絡をとることができている。さらに、当初は退所生の問題としてとらえていたものが、その背景（生まれ育った家族からの影響など）を知ることを通じて、表面からは見えていなかったことも分かってきた。

今後に向けては、児童養護施設と児童養護施設の子どもたちについて、社会に伝えていくソーシャル・アクションの必要性を訴えている。複雑な家族背景を背負っているからこそ、社会生活が送れない現実もある。子どもたちの背景と現状を知ってもらう必要があるとしている。

都内の施設においても、今回のプロジェクトが施設を通しての支援であることを評価している。このプロジェクトによって会うことができた退所生や、退所生の理解について新たな気づきも得ている。この施設では、インケアの段階からSOSを出せるように実践してきているが、やはり退所生はSOSを出すことが難しいということや、本人とは連絡が取れていて、本人も「大丈夫」と言っている、生活の内実は異なっていたことなどである。表面上のことばや健康状態で判断してはいけない事を思い知ったという。さらに、支援を求められても、こちらからは支援できない辛さも痛感している。今回、支援ができる後ろ盾があって退所生に連絡を取ることができ、「堂々と」会うことができた。

今後には、アフターケアにも使える通年で申請できる基金を要望している。加えて、孤独を抱えている退所生への伴走型支援を行うためにも、施設担当職員の一人当たりの児童数は半分ほどにすることを提案している。

3) NPO STARSへのヒアリング

6都府県の施設から各1名ずつが参加し、リービングケア、アフターケア、今回のプロジェクトや今後の要望についてグループで話していただいた。それぞれの地域と施設の特色のもと、日ごろの実践や思いが語られていたが、一つひとつが考えさせられる内容であり、退所生へのアフターケアを工夫していくうえでの助言となった。

以下、5つの項目に分けて主な実践例や意見をまとめていく（同様の意見はまとめて記している）。

①退所生への支援担当

- ・退所する1年前に複数の担当者と繋ぎ、お金・薬・食事などテーマごとに担当がいて、退所生は、その職員に連絡する。
- ・複数の職員が関わる（家庭支援専門員、所属棟のチーフ、子どもの担当職員）
- ・複数の職員が関り、例えば、調理担当などは子どもの好きなメニューの作り方を教えたり、健康担当が投薬管理を指導する。
- ・子どもが選んだ職員を退所後の主担当に。
- ・若い職員と、（子どもが小さい頃に担当していた）ベテラン職員がペアで対応。職員が退職した時の継続性の担保。
- ・自立支援コーディネーターが家庭支援専門員を兼務して担当。
- ・担当した職員が主に支援しているが長く勤務している職員がみんなに関わる。

②児童養護施設から社会に向けて

- ・施設以外の主催による、自立支援セミナーやキャリアカウンセラー講座、アフターケア事業の委託機関での一人生活の体験などに参加させる。
- ・就労に向けた職親プロジェクトで就労体験。職親は住むところも提供する。
- ・児童養護施設の子どもの雇ったことがない企業と一緒に仕事と生活を支援する。
- ・子どもたちが頼れるところは施設だけにせず、色々な人に支えられているのがよい。
- ・地域の子ども会や野球チームなど、外の団体に入ることも大切。
- ・社会福祉協議会の自立支援資金の貸付制度を利用している。
- ・施設独自の奨学金がある。
- ・大学生活と自立生活の両立が難しいので、20歳まで措置延長して施設にいられるようにして、大学生活に力を注げるようにする。
- ・15～16歳は、まだ未熟なので高校中退しても18歳までは施設でケアしたい。定時制高校などに入りなおして施設で生活をしながら、時間をかけて自立の準備をさせる。
- ・外国籍の子どもには、退所後の在留資格申請の支援も行っている。
- ・親のいない子どもには、入所中から未成年後見人に繋げておく。
- ・主任と心理が入り、高校生のグループワークを月に1度実施。悩みや施設を出ることの不安を話し合う。お金の使い方や人間関係についても講義。
- ・年に一度、退所生（先輩）を呼んで失敗談も含めた体験談を話してもらう。
- ・退所する前に、小さい時からの生い立ちの整理をしておく。

◆障害を抱える子ども

- ・特別支援の子どもは、就労・生活支援センターのワーカーに入ってもらい、仕事と生活の両面をサポートしてもらうが、最初は施設職員も一緒に支援をする。
- ・障害者施設、福祉分野の通勤寮やグループホーム、未成年後見人、地域の福祉障害課と繋がり、本人が誰に頼ればよいのかをわかるようにしている。
- ・特別支援学校は卒業後の支援もよい。

◆家庭復帰

- ・家庭復帰は退所前に、家族・親族と児童相談所、施設で会議。約束事の確認や家族関係の調整。役割分担。
- ・家庭復帰して好転するケースは少ない。高校まで施設にいて、その後に自立するケースが多い。親には就職の保証人にはなってもらっている。

③退所生と施設が繋がる工夫

- ・職業指導員が個人の携帯ではなく、施設の携帯でLINEのやり取りを月に1度、行っている。
- ・職員の携帯番号を退所した子どもに教えている。子どもとの関係で職員個人には気軽に相談できる場合が多いため。しかし個人携帯での対応は負担にもなるため、施設の携帯があり、職員が相談に使えるとよい。
- ・退所生からの相談内容は職員間で共有し、その職員が抱え込まないようにしている。
- ・退所後の定期的な連絡は必要。最初は週1回程度、落ち着いてくると月に1回程度。
- ・問題が大きくなってから介入することもあるので、こまめな連絡は必要。
- ・子どもが施設に依存するのではなく、必要なときに連絡が取れるようにすることが大切。
- ・連絡が来た時は、ゆっくり話すようにしている。
- ・施設のお祭りを年に1回、土曜日に開催し退所生が帰りやすい環境づくり。退所生も同窓会気分で集まる。
- ・年に一度バザーがあり、参加した退所生には住所を書いてもらって、クリスマスカードを送っている。
- ・お金の管理ができない退所生は、本人の希望で、まとまった手当などが入金されている通帳を施設が預かっている場合がある。預かっている子は、施設に来て話す機会があるので悩みを把握できる。
- ・どんな形でもよいので、施設に相談できるような関係性をつくりたい。

④退所生支援の難しさ・悩み

- ・施設を出て、うまく仕事に繋がること。
- ・高校生の時に2～3年だけ施設で生活して、退所した子どもの支援が難しい。
- ・退所後の財産管理やお金の使い方：退所時には手当や奨学金など100万円以上の大金をもって出る子もおり、数か月でお金を使ってしまって身動きが取れなくなる。
- ・退所生が家庭を築いている場合など、施設から連絡してほしい人や施設にいたことをパートナーに伝えていない人もいるため連絡には慎重さが求められる。
- ・定期的な連絡について、退所してから何年まで連絡するかが検討事項。

- ・ 困難さは、担当職員との個人的な結びつきに委ねている面が大きいこと。

⑤今回のプロジェクトに関して

- ・ 退所生の年齢などの制限がなく職員の裁量で使えてよかった。昔に退所した人とも繋がれた。条件のない支援の必要性を感じた。
- ・ 今回のプロジェクトでは、頻繁に退所生に関わる機会があったので生活状況を把握しやすく必要な支援がわかった。
- ・ より積極的に退所生の状況を把握しアプローチすることが大切。個々のニーズがわかり、今後のアフターケアに活かすきっかけとなった。
- ・ 追加の2万円について。今までは退所生に会うための交通費や食事代を職員の自腹で払っていたが、今回はこれを使って会うことができた。退所生の交通費にも使えた。
- ・ プロジェクトを利用した子育てをしている退所生が、子育ての相談電話をくれるようになった。
- ・ コロナ禍に限らず、施設が10万円を支給するのは厳しい。
- ・ このプロジェクトは即時性があった。希望としては、コロナ禍でなくても困ってしまった時に現金で支援できるような、いつでも利用できる基金があると良い。
- ・ 普段から支援の体系ができていない施設には、お金の支給と並行して、資金使途のガイドラインや支援の好事例の紹介など、コーチングができると良いのではないかな。